

小川三四郎が〈英文学者〉となる未来 ——ジョン・ロレンスの学統と「助教授B」千葉勉の航跡に照らして——

橋川俊樹

(1) 「有名な学者」になる未来

「三四郎」(1908年9月～12月)の冒頭、小川三四郎は上京途中で同宿した女から「あなたは余つ程度胸のない方ですね」と笑われて、プラットホームに弾き出されたような衝撃を受け、あわてて鞆から取り出したベーコンの論文集に顔を埋めて考える場面がある。

「何所の馬の骨だか分からないものに、頭の上がらない位打された様な気がした。ベーコンの二十三頁に対しても甚だ申訳がない位に感じた。どうも、あゝ狼狽しちや駄目だ。学問も大学生もあつたものぢやない。」(一)

ここでのフランシス・ベーコン論文集は、「学問」の象徴であることは言うまでもない。ベーコンには『学問の進歩』The Advancement of Learningという著書がある。漱石は三四郎に「学問」が何の力も持たない現実世界(ここでは「女」)を体験させたのだ。

しかしそれでもなお三四郎は「学問」の力を信じ、しおれた気分を引き立て直す糧ともしている。

「三四郎は急に気を易えて、別の世界の事を思ひ出した。——是から東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具つた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがると云ふ様な未来をだらしなく考えて、大いに元気を回復して見ると、べつに二十三頁の中に顔を埋めてゐる必要がなくなつた。」(一)

「大学」に入り、「有名な学者」に接触し、「著作」を出して世間から認められる「未来」。それを何の脈絡もなく夢想できる三四郎は、まだ若いとしか評しようがないが、それだけ「大学」に入ること、「学者」となる(未来)に大きな期待を寄せていたと言えるだろう。

小論は、この三四郎の〈未来の学者像〉に現実・事実の光を当てて考察したい。

甘い〈未来〉を夢見るこの場面のすぐあとで、目の前の鬚の男(広田)を観察した三四郎は次のように鑑定する。

「髭を濃く生やしてゐる。面長の瘡ぎすの、どことなく神主じみた男であつた」、「学校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。」、「服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だろう。是より先もう発展し

さうにもない。」(一)

実際の広田は中学ではなく第一高等学校の教師だったわけだが、三四郎の鑑定はかなり正確であったとっていい。広田先生は三四郎が望む「有名な学者」ではなく、与次郎が裏で大学講師就任運動を画策するほど世間的にはまったく無名の英語教師に過ぎない。

広田は古い大学卒業生で1889(明治22)年の憲法発布の年に一ツ橋時代の一高生だったのだから、夏目漱石(1867-1916、1903-1907東大在任)とほぼ同じ年令・学歴に設定されている¹⁾。漱石は1890年に数え24才で第一高等中学校を卒業し、帝国大学文科大学英文科(1887年開設)に入学した。広田もまったく同じとすれば、「三四郎」の作中時間が定説通り1907(明治40)年だとして、41才になる。三章の佐々木与次郎のこぼしを借りれば、「昔から今日に至るまで高等学校の先生」「もう十二、三年になるだろう」、「学校じゃ英語だけしか受け持つていない」、「著述」は何もない、「独身」の語学教師である。

こういう広田の姿が三四郎の願う「有名な学者」像と対照化されていることは明らかである。広田は大学教授の地位や〈学者〉というステータスに無頓着な、在野の傍観的批評家・知識人として描かれる。そういう広田に三四郎は惹かれていくようになるが、ここで問題にしたいのは「有名な学者」になるという初期の甘い〈未来像〉である。

三四郎が望む〈学者〉、中でも〈英文学者〉とは当時どんな姿だったのだろうか。始業日から十日もたって、やっと開かれた講義に臨んだ三四郎の前にその姿の一つが現れる。

「三四郎が初めて教室へ這入て、外の学生と一所に先生の来るのを待つていた時の心持は実に殊勝なものであつた。神主が装束を着けて、是から祭典でも行はうとする間際には、かう云ふ気分がするだらうと、三四郎は自分で自分の了見を推定した。實際学問の威厳に打たれたに違ない。そのみならず先生が号鐘が鳴つて十五分立つても出て来ないので益予期から生ずる敬畏の念を増した。そのうち人品のい、御爺さんの西洋人が戸を開けて這入て来て、流暢な英語で講義を始めた。三四郎はその時アンサーという字はアングロ・サクソン語のand-swaruから出たんだということを知えた。」(二)

この「人品のい、御爺さんの西洋人」教師のモデルが、ジョン・ロレンス John Lawrence (1850-1916、1906-1916東大在任)だと考えられる。

ロレンスは1906(明治39)年9月に来日し、東京帝国大学文科大学英文科担当の〈外国人教師〉となった²⁾。同僚のアーサー・ロイド(1852-1911、1903-1911在任)は講師であり、その前のラフカディオ・ハーン(1850-1904、1896-1903在任)も帰化人であったために公式には日本人講師であった³⁾。つまりロレンスは東京帝大において、J・M・ディクソン(1856-1933、1887-1892在任)、オーガスタス・ウッド(1855-1912、1892-1896在任)以来の、正式な英文科〈西洋人教授〉と言ひ得る人物であった。

そこで小論では、小川三四郎を1885(明治18)年生れて1907(明治40)年9月入学の英文科学生と仮定した上で、彼が望んでいた、世間の喝采するような著作をもつ「有名な

学者」に〈英文学者〉として現実になれたとしたならば、どんな「学者」になれたのかを考察してみたい。そのことは、漱石なきあとの文科大学英文科のその後を考えることと交差するはずである。

(2) 文科大学英文科の1907年

まず、『三四郎』に描かれた1907（明治40）年9月当時の東京帝大文科大学英文科（正式には英吉利語学英吉利文学科）の実態について見ていきたい。

前年の1906年7月19日付狩野亨吉宛書簡で漱石は、「今般東京大学にては一名の西洋人を雇ひ入候由なれば小生は都合によりては辞任するとも差支なきに至るやも計りがたく。就ては当地高等学校を根拠地と致しこゝにて相当の待遇を得ば小生は夫にて満足なれば京都の方は他人に譲りたく候」、と書いた。この新たな西洋人教師がジョン・ロレンスである。

1906年の漱石は、4月に『坊つちやん』を発表し、5月に『漾虚集』を刊行、この7月19日は『吾輩は猫である』の最終回（第十一回）を書き終わった頃に当たる。最も創作意欲の旺盛な時期であり、このあと9月に発表する『草枕』で新進作家としての地位が確立することになる。

この書簡は、京都帝国大学に創設される文科大学の学長となる狩野からの教授就任要請を断る手紙の一つであり、仕事の楽な一高の英語教師だけをして余力をすべて著作に向けたいという、留学から帰国して以来の念願を表明したものである。ただし、〈著作〉の内容は始めのうち壮大な〈文学論〉の著術を構想していたものが、この頃になると小説の創作に変化している。京都帝大の方はその後、英文科の同僚講師だった上田敏が洋行（1907年11月～1908年10月）のあと単身赴任で京都に入り、その地位に就いた⁴⁾。

周知のとおり漱石夏目金之助は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）のあとを受けて、アーサー・ロイド、上田敏（1874-1916、1903-1907在任）とともに文科大学英文科講師となった。ロンドン留学（1900-1902）時の身分は熊本第五高等学校教授であったが在京を希望し、美学教授の大塚保治や一高校長だった狩野の尽力で大学と一高の講師になったのである。漱石自身の希望は一高教授のみであったがポストが空いておらず、大塚の周旋で大学講師にもなったといわれる（『文学論』序など）。

関田かをる『小泉八雲と早稲田大学』が当時の文科大学学長・井上哲次郎の自筆日記を用いて明らかにした事実によれば、1903年1月31日に大塚が井上を来訪し、2月3日に漱石が来訪、以後漱石は3月末までに四度も来訪している。その相談内容のひとつは無論、講義内容についてであったろう。後年、漱石は井上に挨拶に行ったときのことを「上はチョウサーからはキップリングまで講じて下さい」と声色を使って安倍能成に話したという⁵⁾。また、当時起こっていたハーンの留任運動への対処についても話が合ったかもし

れない。井上は3月に二度、慰留のためにハーンに会っているが不調に終わった。おそらくその後で他の二人の人事に着手したと考えられる。上田敏が選ばれたのはハーンの教え子であったからで、明らかに留任運動の鎮静化をねらったものだろう。面白いことに上田敏は講義のテーマにチャージャーを選んでいる。井上の言を忠実に守ったのかもしれない。担当時間は、漱石とロイドが6時間、上田は2時間であった。

そうして1903（明治36）年4月からの三年半、英文科は漱石・ロイド・上田敏の三人講師体制で維持されていたが、そこに正式の〈外国人教師〉として雇われたのがロレンスである。当初のロレンスの担当時間は不明だが、漱石の時間数は減っていないので同じ外国人のロイドの受け持ち分で調整したのかもしれない。漱石と上田敏が去ったあとは、10時間ないし12時間を担当したという⁶⁾。

関田かをるの前掲書にも紹介されているように、井上哲次郎は日本人の英文科主任教授の候補者として漱石を招聘したように回想しているが、講師時代の漱石を昇格させる動きはまったく見られない。そこへ狩野宛書簡にあるように漱石には何の相談もなくロレンスの招聘が決まったのだから、この人事自体が漱石の辞任をうながすものと受け止められても仕方のないものと言える。格下の東京高等師範学校教授でもあった上田敏にしても、東京帝大教授への道が断ち切られた思いがしたことだろう。

ロレンスが着任した1906年9月以降、漱石は作家になる道を急速に模索し始め、11月には読売新聞からの誘いを検討し、翌年2月の朝日新聞からの招致に応じて大学を去った。このとき大学側も「英文学の講座担任の相談」（1907年3月4日付坂元雪鳥宛書簡）を持ちかけたが漱石は翻意せず、大学を痛烈に皮肉った『入社と辞』（5月3日、東京朝日新聞）で当局者たち——当時の総長・浜尾新、文科大学学長・坪井九馬三、文科のボス的な存在だった井上哲次郎と上田万年など——に報いたのである。

こうして三四郎が入学した1907年9月当時は、3月に漱石が大学を去り、上田敏も11月の私費留学のため大学を離れ、英文科の専任にはロレンスとロイドの西洋人教師しかいなかった。もうひとりアメリカ人英語講師スウィフト John Trumbull Swift（1861-1928、1900-1920？在任）がいたが、彼は東京高等師範を主とする兼任講師に過ぎない。

つまり、小川三四郎が将来目指す「有名な学者」が〈英文学者〉であったとするならば、三四郎は必然的に新たに英文科の主宰者となったジョン・ロレンスに付くしかないという状況だったのである。

『三四郎』第六章に、「西洋文学」を研究する学科の新入生懇親会が描かれている。つまり英文科・独文科・仏文科の一年生であり、当時の学科選択は10月末に決定されていた⁷⁾。この会に行く前に佐々木与次郎は三四郎に注意を与えている。

「与次郎の用事といふのは斯うである。——今夜の会で自分達の科の不振の事をしきりに慨嘆するから、三四郎も一所に慨嘆しなくつては不可ないんださうだ。不振は事実であるから外のものも慨嘆するに極つている。それから、大勢一所に挽回策を講ず

る事となる。何しろ適当な日本人を一人大学へ入れるのが急務だと云ひ出す。」

「其時広田先生の名を持ち出す」、与次郎のこの計画は懇親会後も順調に進み、「西洋人許では不可ないから、是非共日本人を入れて貰はうという所迄話はきた。是から先はもう一遍寄つて、委員を選んで、学長なり、総長なりに、我々の希望を述べに遣る許である。」

(八) ということだったが、「大学の純文科」(十一) と題する次のような新聞記事が出る。

「大学の外国文学科は従来西洋人の担当で、当事者は一切の授業を外国教師に依頼してゐたが、時勢の進歩と多数学生の希望に促がされて、今度 愈 本邦人の講義も必須課目として認めるに至つた。」

その日本人候補者は広田ではなく、また別な新聞は広田の姑息な就任運動を糾弾していた。当時の文科大学は、〈国学系〉と〈漢学系〉、それに「心理学・社会学・教育学・美学などを包摂する」〈哲学系〉、そして〈西洋文学系〉の四系統の学科に分かれていた⁹⁾。「純文科」や「外国文学科」とはその〈西洋文学系〉を指しており、確かに1907年秋の時点に限定するならば、英文科にはロレンス・ロイド・スウィフトの西洋人三人しかおらず、仏文科にはエック(1868-1943、1891-1921在任)しかいなかった。けれども独文科には日本人講師がいて、この1907年に助教授となっている。主任教師のフローレンツ(1865-1939、1893-1914在任)を支えていた上田整次(1873-1924、1900-1924在任)である。彼は1914(大正3)年に師の後を受けて独逸語学独逸文学講座の担当者となり、1916年には〈西洋文学系〉では最も早く教授となった⁹⁾。

もし漱石が「英文学講座」担当の教授昇進を大学側の提案通りに受け入れていれば、上田整次より10年近く早い日本人教授になっていたことになる。興味深いことに『東京帝国大学五十年史』の講座紹介の欄を見ると、英語学英文学講座はこの1907年4月から第一講座・第二講座に分かれている。担当者はもちろん居ない。漱石が担当することを念頭に急きょ設置されたのだと思われる。この講座はやはり1916年になって、第二講座を市河三喜助教授が初めて担当した。

与次郎が嘆く「外国文学科」特に英文科の不振は、ハーン・漱石の時代からすでに学生間に認識されていた。ふたりの教え子である金子健二(1880-1962、1905卒)は、「英文科の学生はかくの如く教授会にすら正式に列席し得る先生を一名も持つてゐなかつたのだから、常に継子扱ひを大学から受けてゐたやうに考へてゐて、他の哲学・国文・国史・西洋史等の学生とは異つて、皆独自の立場から大学と遊離した存在を意識してゐた」(「人間漱石」と述べている¹⁰⁾。また金子の日記の1905年1月17日の部分に、「私達英文科学生から、何か大学当局への希望の事柄について愁訴すると、先生(=漱石)はいつも私達に向つて『私は大学の教授といふ立派な肩書を持つてゐない人間だよ。だから、諸君はそのやうな事件の取次ぎを私に依頼しても無効だよ』」、とある。

英文科不振の原因は講座担当者不在にあるが、これについて浜尾新は「文科大学でも英文学や独乙文学やの両科の外には日本人の教授が皆あつたので、此両科ばかりは矢張当国

の文学は当国の人の方がよいといふ理由に発足してゐたのと、此他の学科にそれぞれ必要な教授を置く事の爲めにいはば中々そこへまわらなかつたのです。」「(『大学と漱石』)と言
う¹¹⁾。要するに、教授会で人事を主張する担当教授がいなかったがために、他学科の教
授人事の後回しにされていたということである。

1906年に大学側がロレンスを招聘した時、彼を主任教授の位置に据えようという意志
が当局者にあつたのかどうかは分からないが、1907年9月時点でジョン・ロレンスは英文
科の実質的な講座担当教授となり、ハーンや漱石とは違って、学内人事にも積極的に関
わっていくようになる。具体的には、与次郎が広田先生を押し込もうとしていた英文科の
講師・助教授に、自分の愛弟子の千葉勉^{つとむ}、市河三喜^{さんき}、齋藤勇^{たけし}らを抜擢するようになるので
ある。

(3) ジョン・ロレンスの時代

ジョン・ロレンスの経歴を主に手塚竜磨『英学史の周辺』、佐々木達・木原研三編『英
語学人名辞典』、武内博編著『来日西洋人名事典』をもとに記述すると次のようにな
る¹²⁾。

《1850年12月20日、イギリスのデボンシャー生れ。サマ
セット州の小学校を出て、その後小学校教師をしながらカ
レッジに通い、ロンドン大学に進んで1878年に修士号ま
で取得した。パリ・ベルリンなどに留学後、1891年から
94年までチェコのプラハ大学で英語学を教えた。この間、
1892年にロンドン大学から文学博士号を取得。そののち
オックスフォード大学ユニヴァーシティ・カレッジに入り、
1898年に48歳で卒業した。1901年に修士号取得、
オックスフォードとロンドン大学ベッドフォードカレッジ



写真①

で教えた。同僚の中世英文学の権威W・P・ケア William Paton Ker (1855-1923) と
親しむ(ちょうどこの頃、漱石はロンドン大学でケアの講義を聴いている)。1906年
9月、日本の文部省からの要請に応じて来日、東京帝国大学文科大学の外国人教師と
なる。》

ロレンスは満55才で来日している。写真①のイメージ通り、どの紹介記事や回想を見
ても、「御爺さん」、老齢のイギリス紳士という見た目の評価は変わらない。

当時、英文科の二年生だった野上豊一郎(1883-1950、1908卒)の小説『ミナ』の冒頭
にロレンスの姿が登場する¹³⁾。

「僕が大学のセミナーで此詩(ロバート・バーンズのThe Two Dogs)を読んだ頃の
事を色々思ひだした。その中にAnd stroan't on stones on hillocks wi'himと云ふ行が

ある。其stroan'tといふ字が分らなかつたから僕は何心なく教師に尋ねて見た。その時ほど、あの英国の老紳士が不快な顔をしたのを見た事はない。彼は黒い頭巾を冠つた小さい頭が幅広い肩の中にもぐり込んで了ふかと思はれるまで身震ひして、それは小便をすると云ふ^{スコットランド}蘇格蘭語だと紙の端に書いて見せた。」

また、ロレンスが大学で教え始めた当時をリアルに描き出してみせた小説がある。豊一郎の妻・野上弥生子の『助教授Bの幸福』(1918年9月、「中央公論」)である¹⁴⁾。

その中では、A氏(=漱石)が「専念文筆の人となるために大学を辞」したあと、残された学生たちの失望など「何んにも知らない、人のよい老人が現はれて、英国の古代文学と沙翁研究と言語学とを講じ始め」る。

「一句の科白、一行の詩の解釈にも、飽くまで独創的な芸術批判を怠るまいとしたA氏のやり方に対してS老教授(=ロレンス)の講義はすべてがただ考証であり、引用であり、註解であつた。而して講義が親切で精密であればあるだけ、学生の期待とますます反したものになつて行つた。学生は彼の善良と博識を認めた。言葉の優れた選択と、デリケートな音楽的調子を有つた彼の『よき英語』にも感心させられてはゐたが、「古代英語に於ける或る代名詞の使用法の研究に数時間を費すやうな講義を聞く位なら、寧ろ純粋な言語学科に転ずべきであるとさへ彼等は思つた。」

この『助教授Bの幸福』は、後述する「助教授B」のモデル千葉勉(1883-1959、1907卒)に対して、どう作者が弁解しようとも¹⁵⁾、悪意に満ちた感情の上に成立しているので全てを事実に基づくとすることはとてもできないが、ロレンスに関しては弥生子が豊一郎などから聞き知ったことを忠実に再現した上で想像を加えたものと推定できるだろう。

これに対して、ロレンスの着任時に一高から言語学科に入学し、高弟となった市河三喜(1886-1970、1909卒)の追悼文「ロレンス先生」を見てみよう¹⁶⁾。

「故ロレンス先生は幼時から貧困と闘い苦学自活、学者として身を立てるには実に不利益極まる境遇に置かれたのである。普通の人ならばとうに学問を思い切るところを虚弱な身体に強固な精神を宿していた先生は三十、四十になってこつこつアングロサクソンやゴシック、アイスランド語などを研究し、五十になってやっと大学生を教える身となった。それも正当な学歴がないため教授にはなれなかったが、学殖の点では決して教授に劣らないことは、外国で多くの教授に会った私の確信できることである。ケーベル先生はロレンス先生を有するのは文科大学の誇りであり名誉であるとまで讃えられた。」

実に対照的である。刻苦勉励して異国の大学教師となり、親切と情熱をこめて教壇に立ったイギリス人老博士への見方は、立場や好悪によって大きく変わるのだろう。

ロレンスには論文がほとんど無く、著作も無かった。しかし、彼が東大で残した無形の業績には目を見張るものがある。まず、市河三喜・斎藤勇(1887-1982、1911卒)を始め、土居光知(1886-1979、1910卒)、沢村寅二郎(1885-1945、1910卒)、佐藤清(1885-1960、

1910卒)、豊田実(1885-1972、1916卒)などの代表的な英語英文学者を門下から輩出した。また、「ゼミナール制を採用し、古代英語や中世英語、さらには古典語を教授した。後者の代表的な研究者としては田中秀央博士を育成」(『来日西洋人名事典』)した。言語学科の田中秀央(1886-1974、1909卒)は、仲のよかったケーベル(1848-1923、1893-1914在任)と共通の弟子である。

このように「学者」の育成能力がのちに評価されたロレンスは、一方で『助教授B』が描くように一般の英文科学生からの受けは就任当初から悪かったらしい。彼が採用したセミナー(ゼミナール)制度も、参加者は厳しい試験に合格した者に限られていた。田中秀央は「英文科の学生の中でも優秀な人々が、先生から特別な指導を受けてゐた」と回想している(1948年6月、「知慧」)。田中自身はケーベルの推薦で試験を受けずに参加した。

それ以外にもロレンスは、自分が見込んだ学生を大学院に残し、時間外にほとんどマンツーマンの指導を行なっている。市河に次のような回想がある¹⁷⁾。

「ギリシア、ラテンに京都の田中秀央君と一緒に、Old EnglishやMiddle Englishは千葉勉君と一緒にやったが、GothicやIcelandicは自分一人だけであった。夏休みは軽井沢に呼ばれて毎日数時間づゝphonetics(用書Rippman, Jones)を仕込まれた。」

ロレンスのシェークスピア講義の様子については、『助教授Bの幸福』と同じ「中央公論」(1919年1月)発表の『あの頃の自分の事』の中で芥川龍之介(1892-1927、1916卒)が書き留めている。

「講義のつまらない事は、当時定評があつた。が、その朝は殊につまらなかつた。始からのべつ幕なしに、梗概ばかり聴かされる。それも一々Act 1, Scene 2と云ふ調子で、一くさりづつやるのだから、その退屈さは人間以上だつた。自分は以前はかう云ふ時に、よく何の因果で大学へなんぞはいつたんだらうと思ひ思ひした。が、今ではそんな事も考へない程、この非凡な講義を聴く可く余儀なくされた運命に、すつかり黙従し切つてゐた」、「うとうとして、ノオトに一頁ばかりブランクが出来た時分、ロオレンス先生が、何だか異様な声を出したので、眼がさめた。始めはちよいと居睡りが見つかつて、叱られたかと思つたが、見ると先生は、マクベスの本をふり廻しながら、得意になつて、門番の声色を使つてゐる。」

これは晩年、ロレンスが亡くなる年(1916)の講義風景だが、始めからあまり変わらなかつたに違いない。金子健二が書き留めたアーサー・ロイドの『ウィンターズ・テイルズ』の講義ぶりも¹⁸⁾、解説が長々とあつた上でおもむろに批評に入ったというからイギリスでは一般的な講義方式であつたのかもしれない。しかし、夏目漱石が〈幽霊〉の効果について独自の解釈を述べた『マクベスの幽霊に就いて』(1904年1月、「帝国文学」)や、野上豊一郎が自分のノートを公刊した漱石の『オセロ評釈』の詳細な内容に比べて¹⁹⁾、あまりに単純素朴である。

斎藤勇は、「Dr John Lawrenceはphilologist〈文献学者・言語学者〉としては立派な学

者であり、そして詩の解釈はまことに有益であったが、文学批評はあまり得意ではなかった。そして当時は講師が Arthur Lloyd, J.T.Swift 両氏だけで日本人講師はひとりもいなかったもので、将来文筆をもって世に立とうとする有為な学生は、数年前まで講師であった夏目漱石か誰かの門を叩くのが普通だった。」とロレンス時代を回想している²⁰⁾。

ロレンスの授業には、いくら熱心に講義をしても学生たちに伝わらないもどかしさの他にも、日本語が分からないロレンスと学生たちの低い英語力の問題もあった。同僚のロイドの方は日本滞在が長く、日本研究・仏教研究もし、また徳富蘆花の『自然と人生』英訳(1913刊)など翻訳者としても有名であったから日本語に困ることはなかった²¹⁾。

『助教教授Bの幸福』はその辺りのロレンスの苦悩を次のように描いている。

「上品で善良で且つ少しの日本語も解しない老教授には、学生達のその込み入った感情が理解され得る筈はなかつた。が、たゞ一つ彼等が自分の講義を悦ばないらしいと云ふ事だけは明白に分つた。その事が彼を非常に狼狽させた。彼はどうしてよいか分らなかつたので、たゞますます熱心に、真剣に講義する事に依つて学生を引きつけようとした。併し彼が熱心になればなるだけ、学生の方は溜らなくなつて逃げ出した。斯うして彼の時間に於ける聴講者は、極めてあはれな人数をしか残さないやうになつてしまつた。」

このあとS老教授は「受け持ちの科」(英文科)に限って一斉試験を行い、一定の講義に聴講制限をかけようとして学生の反発を買い、計画を撤回せざるを得なくなる。この事件は作者の創作だろうが、その元になっているのが例のセミナー制度であると思われる。

『漱石全集』にはロレンス宛の書簡が二通収録されているが、いずれもセミナー参加者の資格試験についての返信である。1906年12月7日付の書簡に、「I am rather inclined to dispense with it and leave it to you and Mr. Lloyd to decide their competency for the admission to the Eng. Seminar.」とあるように、資格試験を行うように要請された漱石が、別に私はやらなくてもロレンスとロイドのお二人の試験結果に従うからいいでしょう、と断っている書簡である。この時点でロレンスは「セミナー」の立ち上げを企画・実行していたことが分かる。英語能力の高い学生を身边に集めようとしたのだろう。

文科大学は、1904(明治37)年に大規模な制度改革を行なったが²²⁾、主眼は単位制度の導入と卒業論文・口頭試験の実施であった。金子健二は制度施行第一回目の学年に当たり、1905年6月に英語で書いた卒論を提出し、漱石・ロイド・上田敏を前に口頭試験を受けている。ロレンスの「セミナー」創設は、英文科の学生向けには卒論対策の意味合いもあったのだろう。

そしておそらくこの時の「セミナー」参加資格試験において、優秀な成績で合格したのが英文科三年生だった千葉勉である。のちに千葉は実験音声学の方面での権威となり『英語学人名辞典』に名を残しているが、英文科の主任教授争いで後輩の市河三喜・斎藤勇の二人に破れて、そののち正当な〈英文学者〉になる道からはずれていった人物でもある。

小論のテーマは〈小川三四郎はどんな《英文学者》になれたのか〉であるが、それはつまり、三四郎は市河三喜・斎藤勇のようになれたのか、千葉勉のようになるのかという問に置き換えられる側面を持つ。

(4) 千葉勉とロレンス没後の英文科

【助教授Bの幸福】は、ロレンスと千葉との出会いを次のように書く。

「この便りない、孤独な老教授が、意外な手近に彼の講義に忠実に耳傾け、好意ある同情を以つて自分に接近しようと努めてゐる一人の学生を見出した時の喜びは想像されるであらう。Bは斯うして容易に、また極めて自然に、彼に近づくことが出来たのであつた。」

これには、Bにも千葉にも備わっていた高い英会話能力が介在していた。そしてここで野上弥生子は、教授に接近するBの利己的・俗物的な心理を次々と描き出す。

「A氏にせよ、又S教授にせよ、彼の目に映ずる相違は単なる名前の頭文字だけに過ぎないと云つてもよかつた。三年間何かを講義して呉れて、無事に自分を大学から出して呉れる人であるならば、要するに誰でも構はなかつたのであつた。この簡単な、飽くまで徹底した実利主義は、今その老人の信任を得て置く事が、将来の自分にどれ程有益であるかと云ふ事を考へさせないでは置かなかつた。」

こうした芥川龍之介ばりの皮肉な心理観察がこの小説の主眼といえるが、弥生子がモデルの千葉勉のことをよく知らずに書いていることは分かっているので²³⁾、「助教授B」への悪意がそのまま千葉への悪意というわけではない。

しかし、豊一郎の一学年上の千葉が最終学年の一年間だけ教わったロレンスの弟子になり、大学院に残り、大学の講師になり、留学させてもらって、帰国後は英文科の正式な講師となって〈英文学史〉等を教えている状況を野上夫妻が好意的に見ていたはずはない。

実は大塚香も指摘しているように²⁴⁾、「助教授B」を千葉勉とするにはいくつかの矛盾がある。第一に千葉は助教授であつたことはない。この小説が発表された1918年9月の時点で東京帝大助教授であつたのは市河三喜である。大学卒業時に「恩賜の銀時計」を頂いたのも市河である。また最後にBは「子爵令嬢」との見合いに思いを巡らしているが、千葉の結婚相手となった田代きみは仙台の有力者の娘ではあつても「子爵令嬢」ではない。これも、著名な法学者にして男爵・穂積陳重の娘と結婚した市河三喜のことを念頭に置いた設定である。

それでは「助教授B」は市河がモデルかといえば、そう思われる可能性は当時からほとんどない。何と云つても市河は言語学科出身であり、漱石辞職当時の英文科の状況に関わりがない。千葉は英文科で漱石から二年半も教えを受けていたにも関わらず、ロレンスの弟子となつた、言わば〈裏切り者〉のように他の学生から見られていたのだと思われる。

その点でハーン留任運動のころに、ひとり運動への参加を拒否して英文科の仲間から孤立したという白村厨川辰夫（1880-1923、1904卒）に似ている（『人間漱石』）。

また、「助教授B」の担当科目が「十八世紀英文学」であることも大きい。言うまでもなくこのテーマは漱石が1905年9月～1907年3月まで大学で講じ、二年後に『文学評論』として発刊したものである。英文科在学中の志賀直哉らが喜んで聴いていたという名講義であり、『文学評論』は『文学論』（1907年刊）よりも人気が高かった。千葉勉も一学年下の野上豊一郎も必須科目として聴いているはずである。それを「助教授B」は、A氏は「主として散文の方面に力を注がれてゐたから、僕は詩をやります」、それで「初めて完全な十八世紀の文学史が出来上る筈です」と言い放ち、学生の矚蹙をかう。これは漱石の講義を聴いていた英文科出身でなければ出ない発言といえる。

それに、市河三喜は一高でも豊一郎の一年後輩で野上家と交流があったというから、その点からも「助教授B」は市河であるはずはない。漱石は一高も教えていたので、豊一郎のように一高・大学と教えを受けてきた学生たちには特に大切な先生であった²⁵⁾。千葉勉は仙台二高の出身であり、英文科後輩の豊一郎との親交も見られない。

【助教授Bの幸福】発表当時、野上弥生子の漱石崇拜は頂点に達していたのだろう。漱石は1916年12月に亡くなり、この当時は岩波版第一次『漱石全集』の刊行直後である。当時の英文科で市河三喜が助教授として君臨するのは許せても、漱石が居るうちからロレンスの方に付き、今は不遜にも漱石の〈英文学史〉に挑もうとしているように見える千葉勉のことは許せなかったに違いない。

しかし、千葉勉がBのような大それた考えで〈英文学史〉の講義を務めていたとは私には思えない。確かに市河三喜に対する対抗心は並々ならぬものがあり、市河が少し先に留学し帰国後すぐに助教授となったことは、嫉妬と不遇意識を強める結果になったであろうが、そういう怒りや嫉妬も口先ほどには根に持たない人物にみえる。少なくとも「助教授B」のような自意識過剰で利己主義に凝り固まったような性格ではない。

千葉の最晩年の弟子にあたる渡部昇一が、「助教授B——千葉勉先生のこと」（2010年8月、「英語教育」）というエッセーを書いている。

「千葉先生は元来は英文学の教授になるべき学徒として東大から文部省留学生として派遣されたのである。戦前の日本ではイギリスに自費で英文学研究に行ける人などはごくごく稀で、夏目漱石以来、文部省の留学生になるのが王道であった。大正元年（1912）には市河三喜先生が、翌大正2年（1913）には千葉先生が文部留学生としてイギリスに留学された。」「同じ頃の留学生だったためか、千葉先生はいつも市河博士については「悪口」と言えるようなことを語っておられた。」

このエッセーに『千葉勉の仕事と思い出』（千葉亨・堀昌子ほか編、1964）という本が紹介されており、その回想や略歴によって千葉の人生の航跡を知ることができた。

1883年、宮城県の二俣村に生れた千葉勉は、宮城県立第一中学校から二高に進み、

1904年に東京帝大に入学した。1906年9月、ジョン・ロレンスと出会い、おそらく12月に「セミナー」に入り、翌年7月の卒業後も大学院に残り「特選給費生」となっている。

この院生時代に千葉は、ロレンスが一高の傍に仮寓していた家に助手として同居しながら教えを受けている（『仕事と思い出』、内田貢の回想）。「五城寮という仙台出身の学生が這入っているのがあって、そこには良い人も悪い人もあるので、ローレンス先生は悪感化を受けてはいけないとお思いになって御自分の家に引き取ったということでした。」（同上、妹・張間栄の回想）、という²⁶⁾。ロレンスはその後、イギリスから家族を呼び寄せ、千葉は家族ぐるみで親しくしている（写真②・③参照、『千葉勉の仕事と思い出』より）。



英国留学時代（大正3年

写真②



恩師ローレンス教授一家
（大学院時代同家に寄宿し
て指導をうけた）

写真③

それから、二学年下の市河三喜と田中秀央が大学院に入ってきて、市河の回想にあるように猛烈な特訓が繰り返されるのは1909年からのことになる。このときロレンスは、千葉に対しては英語・英文学を伝授しただけだったが、言語学の市河に対してはそれらを含んだ、己の知るすべての言語・古典語・文学を教え込もうとしていたようだ。この差が留学の順番が逆転した原因の一つなのだろう。

そして前掲書の「年表」によると、1910年に千葉は「東京帝国大学文学部講師」になっているが、『東京帝国大学五十年史』には記載がない。しかし、斎藤勇が千葉の留学の後を受けて英語講師になっている（1913年3月）ので、この頃に講師になったことは間違いない。もし時期が正しければ、数え28才の非常に若い帝大講師である。1911年10月にアーサー・ロイドが死去し、その穴埋めに松浦一（1881-1966、1905卒）が11月から講師となり専門の授業を担当しているが、松浦よりも二歳下である。

1912（大正元）年10月、市河三喜が欧州留学に出発した。『日本の英学一〇〇年 大正

編』は、読売新聞の記事を引用し、その中に上田万年文科大学長の次のような談話がある²⁷⁾。

「卒業後三か年大学院にいてすぐ留学するのは法科で鳩山君、穂積君のようなのを除き、文科では異数であるが、これは真の留学である。今度市河君は抜群の成績なので選抜されたのである。留学の目的は英語の研究で、三年の後帰朝しては東京帝大文科大学の英語学の教授となるわけである。」

その前月には『英文法研究』を刊行していて、この本は英語学史上高く評価されている。

遅れて翌1913年2月に千葉勉も渡英。二人は前後してロレンスの親友、ロンドン大学のケア教授を訪れて、交流を持っている。

そして1916年2月に市河が帰国、ただちに助教授となり、初めての英文科第二講座の担当者となった。その翌月の3月12日、ジョン・ロレンスが突如死去。市河は英文科主宰者となり、4月に急きょ着任した慶応のプレイフェア Alfred William Playfair (1870-1917) とともに卒論審査・口頭試験などをこなした。この時の卒業生に芥川龍之介・久米正雄 (1891-1952)・豊田実らがいた。市河のちに豊田を副手、講師としている。

また少し遅れてこの年の夏に、千葉勉が帰国し、9月から「東京帝大講師及び東京外国語学校講師」となった。この時の千葉勉の心中には、「どうしてこんな時にロレンス先生は死んでしまわれたんだろう」、という思いが渦巻いていたことだろう。

けれども千葉の帰国時にロレンスが生きていたとして、市河と同じように助教授に挙げ、残りの第一講座担当者にしたのだろうか？ それはロレンスが市河と千葉を同等に考えていたかどうかには拠る、としか言えない。また上田学長の意向も大きく影響したであろう。さらに、千葉のあとを受けて講師を務めていた斎藤勇の存在がある。ロレンスは、千葉と斎藤のどちらに〈英文学者〉として多くの期待をかけていたのだろうか？

ともあれ、洋行・留学という箔を付けて帰国した千葉にすれば、後輩で言語学科出身の市河との待遇差に不満があったにしても、まずは講師としての職務を全うし、また早めに身を固めることを考えたであろう。その結果が翌1917年の結婚になったと思われる。

1917年にも英文科には不幸がつづく。年末になって、プレイフェアが突然亡くなったのである。結局、翌年7月に上智のマクニールが着任するが、当時の東京帝大英文科は非常に落ち着かない時代であった。そこに現れたのが『助教授Bの幸福』である。

内田貢の回想によれば、独文科だった内田は1918年9月から翌年の6月まで千葉の「一般語学」と「英語講読」の授業を受けたというが、当時の千葉が続けていた英文科の学生向け講義「十九世紀英国小説史」の方は休講が多かったという。そして、「千葉先生は、当時の英文科の担当三教官の分担の必要からやむを得なかったとしても、少壮三十六歳にして『十九世紀英国小説史』を毎年続けて何人かの作家を処理して行くことは、或は負担が過重ではなかつたらうか」、と述べている。

当時の三教官とは市河・千葉・斎藤のことで、市河は「英語学」、斎藤は「英詩」が専門であった関係上、千葉が「小説」を担当したのだろう。そしてこの講義の不評のうわさが野上弥生子に届き「助教授B」となったと考えられる。千葉はウォルター・スコットが好きで、留学中に関係地を回った経験をよく自慢していたというから、「小説史」を講じる自信はあったのだろう。しかし、東京外語の愛弟子・島田謹二（1901-1993）が回想しているように²⁸⁾、千葉の講義は改まった方法論を持つような研究というべきものではなく、イギリス紳士風の教養に根差した「一種の人格教育」であったとするならば、千葉の「人格」を疑うかあるいは軽視する雰囲気は文科大学英文科の学生の間にあった場合に非常に微妙な空気が生れた可能性が高い。

こののち、1919年に千葉勉は東京外語の教授となり、1927（昭和2）年に東京帝大講師を辞して東京外語の専任となった。一方、市河三喜は1920年に東京帝大教授となり、1923年に文学博士号を取得、1925年には空席だった「英吉利語学英吉利文学第一講座」担当に替わった。また、斎藤勇は1917年に東京女子高等師範学校教授（帝大講師を兼任）、1923年に東京帝大助教授となり、その身分で欧州留学に出発、1925年に帰国し、「第二講座」を担当。1927年に文学博士号を取得し、1931年、教授に昇進した²⁹⁾。

渡部昇一は、「東大の英文学は斎藤先生と決まると、千葉先生は昭和2年に東大を全く退き、東京外語の専任となられたのである。当時、東京帝国大学から、専門学校の東京外語に転出したことは、いわば世間の——少なくとも日本の英語・英文学界の——耳目を聳動させた事件であったと思われる。プライドの高い先生のエゴは傷ついたと思う。」と書いている。

さらに言えば、この時期、後輩の土居光知が東北帝大（1924年）、佐藤清が京城帝大（1924年）、豊田実が九州帝大（1925年）と、それぞれ帝大教授に昇進し、沢村寅二郎も1927年に東京帝大助教授となっている。いずれもロレンスの弟子たちであり、そういう中で先輩の千葉勉だけが弾き出された感があることは否めない。

(5) 三四郎がなる〈英文学者〉像

1907年東大英文科入学と推定できる小川三四郎は、土居光知・佐藤清・沢村寅二郎らと同級生ということになるが、当時の英文科の状況は翌1908年入学の斎藤勇が書いた、以下の回想とほぼ同じであったに違いない³⁰⁾。

「東大入学は、夏目漱石、上田敏がふたりとも講師をやめたのちで、専任は精励恪勤なジョン・ロレンス博士だけ、講師は英米人おのおのひとり、そして日本人はだれも教えていないという、さびしい英文科であった。ロレンス先生は立派な人柄であり、すぐれた英語学者であるが、文学批判の講義には精彩が乏しかった。」

三四郎は福岡県、千葉が宮城県、斎藤は福島県と地域は異なるけれども、田舎の農村出

身で地元の高등학교を経て東京帝大英文科に入った点でこの三人は同じである。三四郎が志向する〈英文学〉がどんなものになるかは未知数だが、女流小説家アフラ・ベーンや「ハイドリオタフピア」の莊重幽玄な文章を気にしている点からみて、たぶん市河のような「英語学」中心ではあるまい。また、広い意味での文学論を志向していく土居光知や、「讚美歌」を卒論テーマに選んだ、神学者でもある豊田実とも違っているだろう³¹⁾。

三四郎がそのまま〈英文学者〉を目指していったとするならば、〈英文学〉の本体ともいべき詩か小説を選んだであろう。とすれば、当時ただ一人の英文科専任教授といえるロレンスのもとで、それらをテーマに大学院で訓練を受けた、千葉勉か斎藤勇の人生が三四郎に重なる可能性は高い。

斎藤勇は、千葉勉より四歳年下で1887年福島県の富野村生れ。福島中学から二高に進み、仙台の日本基督教会で受洗（市河も1910年に本郷中央会堂で受洗している）。1908年、東京帝大文科への進学を両親と祖父から反対され、上京が始業後の9月末になる。東京では植村正久牧師の指導を受けた。1911年に卒業、卒業論文はテニス論。「恩賜の銀時計」を受ける。大学院に進み、1912年、青山学院講師。1913年、前述の通り千葉の後をうけて東京帝大講師、1914年に結婚。1916年4月、「シェイクスピア」を上梓した。

千葉の帰国した1916年9月から斎藤が助教授になる1923年3月まで、この二人は残る「英文学講座」の椅子をめぐるライバルであったことになる。斎藤はキリスト教信徒であったこともあり、「英国の宗教文学、特に宗教詩への道」を目指し、一方の千葉は、音声学の愛弟子・中野一雄によれば、主に「アーサー王伝説に関する文献学研究」を中心にロレンスのもとで学んだという³²⁾。

結局は斎藤勇が講座担当助教授に選ばれたのは、すでに教授であった市河三喜の意向であろう。他にも市河は、土居光知・豊田実を東大講師に抜擢し、東北帝大・九州帝大へとふたりを送り込んだ。市河の先輩で彼をライバル視して親しまなかった千葉勉が、それらの恩恵にあずかれなかったのは当然といえば当然である。彼等より先輩でハーンと漱石に学んだ松浦一も講師止まりであった。

またもう一つの要因は、市河・斎藤と千葉との〈書く能力〉の差にあったように思う。市河の英語学・英文学における業績については、斎藤が丁寧に解説をしている³³⁾。主だったものを掲げると、まず卒論が「前置詞forの機能の歴史的展開に関する研究」、1912年に「英文法研究」上梓。1921年から1932年まで岡倉由三郎とともに「研究社 英文学叢書」の編集・校訂に従事し、自らも15冊に「註釈」をつけた³⁴⁾。著書は、「英語学、研究と文献」(1936)・「聖書の英語」(1937)という名著を含め多数。論文は極めて多数。

斎藤には、「シェイクスピア（彼の生涯及び作物）」(1916)、「思潮を中心とせる英文学史」(1927)、「英詩概論」(1933)、「キリスト教思潮」(1940)、「英国讚美歌」(1941)、「ブラウニング研究」(1948)、「イギリス文学史」(1957)など多数の著書があり、多くは「斎藤勇著作集」全7巻(1975-1978)に収められている³⁵⁾。

これに対して千葉は、英語英文学についての論文が少なく、著書らしい著書がない。代表的な著作は『実験音声学上より見たるアクセントの研究』（1935、富山房）である。文学部教授には漱石の友人で美学者・大塚保治のように著書が皆無という人もいたが、ライバルの斎藤と比べられる立場を意識していたならば、千葉は昇進のために活発な執筆活動を行うべきであったろう。たぶんロレンス先生を真似て、そういう俗事にはイギリス紳士然とした態度でのぞみ、それでも好結果が生れるものと思い込んでいたのではないだろうか。

小論では、すでに竹内洋「立身出世主義」が「学士『三四郎』の実人生」を検討している例があるにもかかわらず³⁶⁾、東京帝大英文科学生・小川三四郎がもし〈英文学者〉になったら、という限定付きの課題にして取り組んだ。その結果、当時の東大英文科を出て〈英文学者〉になる、ということが歴史的に見ても非常に興味深い、特異な面をもつことが分かった。

第一に、『三四郎』にある通り、当時の英文科には本当に日本人がいなかった。単なる英語講師ではなく、英文科の専門科目を教えた日本人は、夏目漱石・上田敏がやめた1907年のあと1911年11月着任の松浦一まで不在である。つまり、三四郎と同じ土居光知らの学年と、その下の斎藤勇の学年は学科に日本人教師が不在のまま大学三年間を過ごしているのである。

第二に、その間の主任〈外国人教師〉ジョン・ロレンスは、その前の漱石・ロイド・上田敏、そのまた前のラフカディオ・ハーンとは違い、セミナー制度を作り、大学院生を鍛え、〈学者〉を世に送り出す方針を取った結果、大学に働きかけて千葉勉・斎藤勇を講師とし、市河三喜を助教授とした。死後も市河がその意思を受け継ぎ、ロレンス門下を次々に〈学者〉に仕立て上げた。この時期は東京帝大英文科はじまって以来の〈学者〉量産期と言える。もし、ハーンや漱石が講座担当者の地位に着けたと仮定しても、彼らの反体制的な性格ではこれだけの〈学者〉を送り出すことができたかどうか疑わしい。

したがって、もし三四郎にその才能が有り、ロレンスに付いて勤勉に〈英文学者〉となる道を進めば、土居光知（1885生）・豊田実（1885生）・斎藤勇（1886生）のような同世代の学生たちと同じように、帝国大学「教授」となり、彼が夢想したような立派な「著作」をもつ「学者」になることは十分に可能であったとすることができる。

しかしその一方で、ロレンスの教育方針が要するにエリート教育であり、〈学問〉らしい〈学問〉を価値の最上位に置くために、その担い手以外の学生はほとんど無視されるような状況が生まれるという弊害もある。そのあたりの視野の狭さを野上弥生子『助教授Bの幸福』はしっかりと捉えている。斎藤勇の回想にあったように、ロレンスの学統に合わないような〈文学〉志向の強い学生たちは漱石にでも頼っていくしかないような状況だったのだ。

長与善郎(1888-1961、1911-12英文科在籍)は、「〈ロレンスは〉英国古典にかけては多少名の知れた学者だったかも知れないが、二十世紀草創(明治の最末期)という新鋭の気に漲った当時のわれわれ日本青年の気持はおろか、いつの世でも文学の底流をなす「時」の世界思潮の動向といったものについて何の関心も理解もない老紳士であったことは、〈英文科にとって〉得なことではなかった。」と、述べている³⁷⁾。三四郎が、この不利益を被る側の学生になった可能性もかなり高い。

漱石の「木曜会」の弟子たちには意外に英文科出身が少なく、三四郎のモデルといわれる小宮豊隆(1884-1966、1905卒)も独文科である。森田草平(1881-1949、1906卒)・鈴木三重吉(1882-1936、1908卒)らがいるが、臼川野上豊一郎だけが正当な〈英文学者〉の道を進んだ。しかし野上はロレンスとは合わず、また〈選ばれた学生〉でもなかったようだ。そして今では能楽研究者としての名声の方が高い。

ハーン研究家のジョージ・ヒューズは、1921~1924年当時の外国人教師ロバート・ニコルズに宛てた市河三喜の次の書簡(1921年3月18日付)について、「はっきりと率直にエリート主義の立場を示している」と評した³⁸⁾。

「あなたの仕事の成果がたとえあなたの目の前で実を結ぶことがないにせよ、「一人でも真に優れた人を掴むことが出来るなら、他の九十九人はほっておいてもそれだけの価値はあるのではないのでしょうか。その人は一粒の芥子の種のように次の世代に影響を与えるでしょう。」(平川祐弘訳)

まさしくロレンスの学統がここに生きている。功罪両面ともに。

最後に、市河・斎藤ラインから弾き出された千葉勉を追究することによって、様々な要因が重なることで順風満帆の航路が主流を逸れていく〈学者〉の人生を見た。これももちろん、三四郎の「学者」としての〈未来像〉のひとつである。

小川三四郎がその後どんな人生をたどったと仮定しても、彼が冒頭で夢想したような、自分に都合の良い、甘い〈学者〉人生が待っていないことだけは確かであり、そのことは証明できたように思う。むろん作者の漱石に三四郎のような甘い考え方があったはずもない。しかし、「若い」ということは恋愛を含めて〈甘い夢に酔える〉ということであり、三四郎のような夢見る青年を描くことが、当時隆盛を極めていた自然主義が描く〈幻滅する青年〉への反措定であったことは間違いないだろう。

余計なことを付け加えて置くと、東京帝大教授として〈英文学者〉として充実した95年の長寿に恵まれながら、斎藤勇は、精神を病んだ孫によって惨殺されて生涯を終えた。何とも評しようのない実人生の終幕である。

(2012.11.10稿)

〈注釈〉

- 1) 広田のモデルは岩元禎(1869-1941)と言われるが、小論は東京帝大英文科に焦点を当てるため、哲学科出身で一高ドイツ語教師の岩元に関しては言及しない。
- 2) 手塚竜磨『英学史の周辺』(1968、吾妻書房)に、「長らく空席であったお雇外人教師の椅子は一九〇六年の九月になってようやく英人ジョン・ロレンスによってうめられた」、とある。
- 3) 関田かをる『小泉八雲と早稲田大学』(1999、恒文社)参照。
- 4) 安田保雄『上田敏研究〈増補新版〉』(1969、有精堂)参照。
- 5) 安倍能成『我が生ひ立ち』(1966、岩波書店)。
- 6) 前掲・『英学史の周辺』。
- 7) 金田一京助『私の歩いて来た道』(1968、講談社。日本図書センター版〈1997〉)に記述がある。
- 8) 橋本鉦市「近代日本における『文学部』の機能と構造 —帝国大学文学部を中心として—」(1996年10月、「教育社会学研究」)。
- 9) 『東京帝国大学五十年史』(1932、東京帝国大学)の「第五章 文科大学」より。以下、講座について、教授・助教授・講師就任などのデータはこれに拠っている。
- 10) 金子健二『人間漱石』(1948、いちろ社。増補新版1956、協同出版)。
- 11) 浜尾新『大学と漱石』(1916年12月、「洪柿」。平成版『漱石全集』別巻より)。
- 12) 佐々木達・木原研三編『英語学人名辞典』(1995、研究社)、武内博編著『来日西洋人名事典』(1995、日外アソシエーツ)。
- 13) 『新文芸』1910年3月号に発表。同年3月13日付・野上豊一郎宛漱石書簡に、「ミナも拝見あれば面白く候」とある。引用は『巣鴨の女』(1912、春陽堂)より。
- 14) 『助教授Bの幸福』の引用は、『野上弥生子全小説3』(1997、岩波書店)より。
- 15) この作品に対して、江口渙(1887-1975、1912英文科入学・1917中退)が『新潮』(1918年10月)に批判的な評論を発表し、弥生子は翌11月の『新潮』に「私の小説について——江口渙氏へ——」を書いて弁明した。
- 16) 『日本の英学一〇〇年 大正編』(1968、研究社)より。元は市河三喜『旅・人・言葉』(1957、ダヴィッド社)、初出は『英語青年』1916年4月号の「ロレンス先生の事業」。
- 17) 『市河博士還暦祝賀論文集(VI)』(1954、研究社)の「市河三喜博士略伝」より。
- 18) 金子日記の1904年4月27日の所に、「ロイド先生は今日で『ウィントース・テールズ』の解説を全部終つたので、これからその批評に移るとのお話してあつた。」とある(『人間漱石』)。
- 19) 野上豊一郎編『夏目漱石先生評釈Othello』(1930、鉄塔書院)。
- 20) 『日本における英文学五十五年』、『斎藤勇著作集』第6巻(1976、研究社)より。初出は『英語青年』(1963年4月~9月)。
- 21) 『学燈』172号(1911年11月)に「ロイド博士逝く」という記事があり、彼は「日本の衣食住を好みて親子丼を賞美したるほど極端なる日本癖」があったという。また井上哲次郎が「学者としてのロイド博士」という談話を寄せ、ロイドの「阿弥陀」や仏教・朱子学の研究について述べている。
- 22) 『東京大学百年史 部局史一』(1986、東京大学)の「第二編 文学部、第三節 文科大学時代」。
- 23) 『野上弥生子全小説3』の「解題(宇田健)」に、「〈千葉勉は〉鈍感な人のよささうな顔である。少くとも助教授Bをかく時には、彼があんな顔をした人とは思つてゐなかつた」と書いた『日記』(1929年10月30日)の紹介がある。
- 24) 大塚香「野上弥生子『助教授Bの幸福』をめぐる問題系 ——「女らしさ」という陥穽——」(2001年12月、日本大学「語文」)。
- 25) 漱石の「木曜会」の弟子たちには1903~1907年にかけて一高・東大と続けて漱石に接する機

- 会があった者が多い。安倍能成・小宮豊隆・阿部次郎・野上豊一郎らである。
- 26) 『千葉勉の仕事と思い出』(1964)のうち、内田貢「千葉勉先生追憶」と座談会〈父の想出を語る〉より。
 - 27) 注16) 参照。その「市河三喜」の項。
 - 28) 『千葉勉の仕事と思い出』のうち、島田謹二「千葉勉先生を憶う」。
 - 29) 『斎藤勇著作集』別巻(1978、研究社)、「年譜」。
 - 30) 注29) 別巻のうち、「わが道」より。元は朝日新聞社刊『わが道』第2巻(1970)。
 - 31) 豊田実『私の歩いて来た道』(1973、松柏社)。
 - 32) 『千葉勉の仕事と思い出』のうち、中野一雄「アーサー王から音声へ」。
 - 33) 『斎藤勇著作集』別巻の「市河三喜」。
 - 34) ユン・スアン「帝国日本の英文学受容」(2006年8月、「日本教育史研究」25号)。
 - 35) 小谷野敦『文学研究という不幸』(2010、ベスト新書)は歴代の東大文学部教授たちを著書・論文数にこだわって採点した評判記のような本だが、ロレンス・市河などへの言及はない。
 - 36) 竹内洋『立身出世主義〔増補版〕—近代日本のロマンと欲望』(2005、世界思想社)。
 - 37) 長与善郎『わが心の遍歴』(1959、筑摩書房)。筑摩叢書版(1963)より。
 - 38) ジョージ・ヒューズ「ロバート・ニコルズとラフカディオ・ハーン——東京大学の外国人英文学教授と文化政策」(2004年10月、「国文学 解釈と鑑賞」)。ヒューズには「ハーンの轍の中で」(平石貴樹・玉井暲訳。2002、研究社)という外国人教師の研究書がある。

Sanshiro Ogawa's Future as an *Anglicist* : in the Light of the Academic Heritage of John Laurence and the Trail of "Assistant Professor B", Tsutomu Chiba

Toshiki Hashikawa

Sanshiro, the eponymous main character of Soseki Natsume's novel "Sanshiro" was a freshman in the Department of English at Tokyo Imperial University. This paper explores whether, if he had actually carried out his lifelong aim of *learning*, especially *English literature*, what kind of *Anglicist* he would have been.

In Chapter 1: "*The future to be a famous scholar*", I consider Sanshiro's ideal *scholar*.

In Chapter 2: "*Department of English in the Faculty of Literature in 1907*", I consider the situation in the Department of English of Tokyo Imperial University in September 1907. At that time, Soseki and Bin Ueda resigned as lecturers and John Laurence (1850-1916) became the head of the Department of English. I discuss these circumstances with a focus on Soseki, who was treated coldly, and the situation of students in the Department of English.

In Chapter 3: "*The Time of John Laurence*", I present Laurence's career as the head of Department of English and his contribution to Tokyo University, and make referral to the work that *which* illustrate his figure and character his lectures. His biggest accomplishment was to cultivate followers of his *learning*. I focus on one of them, and consider the competition between Sanki Ichikawa and Takeshi Saito for professorship in Chapter 4: "*Tsutomu Chiba and the Department of English after Laurence's death*". In this chapter, Yaeko Nogami's novel "Assistant Professor B," the main character which was modeled on Chiba, is also considered.

In Chapter 5: "*What kind an Anglicist would Sanshiro be?*", I sum up the whole paper.